The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「山下財宝」の行方
Author(s)	梶原, 景昭
Citation	年報人間科学. 1995, 16, p. 21-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「山下財宝」の行方

梶原　景昭

〈要旨〉

フィリピン社会に、今日でもきわめて強い浸透力をもつフォークロアが存在する。それは、太平洋戦争中、旧日本軍が戦争遂行のための財貨をフィリピン国内に隠匿し、現在でもまだ埋まっているというものである。戦争末期に山下奉文大将がフィリピン方面軍司令官として着任し、その後降伏したこともあって、この隠された財貨は「山下財宝」と総称されている。

この覚書は、今日でも人びとがうわさし、実際に財宝を求めて探索を続けている「山下財宝」伝説を、フィリピン社会・文化の文脈のなかで位置づけ、戦後五〇年にわたる変化の軌跡についてもあわせて検討するものである。この伝説のありようは、フィリピン人の世界観、歴史的背景、対外関係、富の概念、経済の状況、国家のあり方、政治権力の性格などを、多層的に映し出している。なお本稿を書くにあたり、平成六年度文部省海外学術調査「異文化共存の可能性」（代表　青木保）に関わる実地調査に負うている。ここに感謝を示したい。

キーワード

山下財宝、富と宝、黄金伝説、戦争の記憶、日比関係

I.

戦後五〇年を経た今日でも、いわゆる「山下財宝」の伝説はフィリピン社会に根強く生き残っている。この「伝説」は複数の文化・社会のはざまに生じ、この五〇年間のフィリピン国内外の変化と重なりつつ、その長い生命を保っている。およそフィリピン国中どこへ行ってもこのうわさを耳にするといってよく、またこの伝説についてなにも知らぬ人はほとんどいないといってよい。

この「伝説」の骨子は、太平洋戦争中、戦争遂行のために蓄えた日本軍の財宝が存在し、その大部分は今日でもフィリピン国内の到るところに隠匿されている、というものである。戦争末期一九四四年の後半に、かつて「マレーの虎」と称された山下奉文大将がフィリピン方面軍（第十四方面軍）総司令官として着任し、やがて敗戦とともに降伏したこともあって、この「財宝」は一般に「山下財宝」と総称されている。財宝伝説のあらわれ方は多様かつ時代によって変化しているが、その主なものは以下のとおりである。

たとえば、かつて戦争末期に日本軍が退却した中央山地の中心都市バギオ市周辺には、今日でも伝説がさまざまなレベルで根強く存在する。事情通に訊ねると、市中の数多くの場所で、戦後財宝の一部が発見されたという。かつて日本軍が接収した住宅や、軍病院跡、退避濠跡など、いうまでもなく日本軍駐留と結びついた場所がそれに当たる。といって実際の発見者を特定できることはほとんどない。うわさによると、通常発見される財宝は金の延べ棒数本ないしは宝石類で、巨満の富をいっきょに発見したという事例は稀である。財宝のうわさは戦後のしばらくのあいだ活発で、現在では忘れさられたというわけではない。

一九九二年から九三年にかけて、日本の経済援助によるバギオ市の下水道改修工事が行われた。市中到るところを掘りかえす工事をみて市中の人びとは、この工事はあくまで隠れ蓑で、日本の建設会社のほんとうの目的は埋蔵金を掘り当てることにあるとうわさしていた。同様の例は、さらに数年前、やはり経済援助の一環で日本の建設会社が中央山地を南北に走る幹線国道の補修・改良工事を行ったときにもみられる。

中央山地には数多くの少数民族が居住しているが、彼らの伝統的な埋葬地である洞穴が各地で宝捜しの盗掘のせいで荒廃しているとの報告も多い。また戦後、旧日本軍人が山中の村々を訪れたという逸話もよく聞かれる。彼らは村の長老に酒を飲ませ、歓談したといわれるが、翌朝村の人々が眼を醒ましてみると、畑の真中に大きな穴が空いていたという。日本人の慰霊団をめぐっても同様の話がある。今日でも宝捜しを行うフィリピン人の数は少なくない。筆者がバギオ滞在中にも、地図らしきものや石に刻まれた符号の解読を頼まれたことはいく度もあった。また日系人の墓地や旧日本軍人の慰霊碑が掘り返されることも多い。ミンダナオ島のコタバト市でもそうした話を聞いている。市のはずれの丘の上に、ピクニック・グラウンドがある。この土地の所有者に訊ねると、市の要請で土地の一画を譲り、一九七六年に日本軍人の慰霊碑が建設された。大阪の青年会議所が、かつてここに駐留した京都のタクミ兵団のために石碑

を建てている。この石碑が建つと、土地の所有者に発掘の申し出が相次いだという。いく人かは許可を得て実際に掘っている。今のところなにも発見されていないが、所有者は資金さえあれば、最近あまり利用者も来ないので、客寄せのために水泳プールを造るかたわら、財宝の掘削を行いたいと語っていた。

かつてマルコス大統領がバギオ市に会議場を建設したとき、基礎部分の掘削が深いことから、市民は建設が口実で、財宝の発掘が真の目的であるとうわさした。同じバギオ市に最近、十九世紀末のフィリピン革命の英雄アギナルド将軍の記念館が完成した折にも、建物の大きさと較べて基礎の掘り方が大規模にすぎるというわさが流れた。ルソン島北部カガヤン州知事のアギナルド氏や、中央山地の少数民族を背景に、ゲリラ組織をつくり政治的影響力を獲得したバルウェグ神父にも財宝獲得のうわさがある。その最大のものはマルコス元大統領である。「マルコス神話」によれば、戦争末期、マルコスは山下奉文の降伏に立ち会い、その経緯から財宝の隠し場所を知り、やがて巨額な財宝を手に入れたという。後年不正蓄財の批判を浴びたときに、元大統領自身このうわさを認める発言をしている。また一九九二年に、かつてアヤラ財閥の総師であったエンリケ・ゾーベルが総額三五〇億ドルにのぼる金塊の保有証書をマルコスから見せられたと発表している。マルコスは、これが「山下財宝」に端を発するもので、晩年この財産をフィリピン国民のために役立てたいと願っていたという。

さらに「山下財宝」をめぐるフォークロアにはつぎのようなものがある。日本軍は財宝を埋めた際に、秘密を守るためにフィリピン人の工事人夫および日本軍の下僚を殺害したという。そのため財宝の隠匿場所には彼らの死霊がさまよっており、今日宝捜しに従事する者は慰撫儀礼を行うといわれている。

外国人も含めた大規模な財宝捜しの例も少なくない。その代表的なものが、マルコス亡命後アキーノ政権下で行われた。一九八七年から、かつての要塞コレヒドール島、マニラ市中のサンティアゴ砦等で大規模な発掘が始まった。この企画はアメリカ人グループを中心とし、フィリピン政府の承認を受けていた。しかも前フィリピン大学総長で、当時国家安全保障委員会委員長のエマニュエル・ソリアーノ氏をはじめとして、フィリピン政府の要人など有力な人びとも加わっていた。しかしアメリカ側は中心的人物のボブ・カーティスをはじめ、詐欺罪で訴えられているような山師集団といってよく、また資金源に極右組織であるジョン・バーチ協会や、世界反共連盟を創立したジョン・シングローブ将軍など、およそまともではない（しかしながら、こうした怪し気な結びつきはアメリカの対アジア関係にしばしば見られる）集団であった。[1]

「山下財宝」の発見譚として注目を集めた例に「黄金仏」事件がある。一九七一年一月末にバギオ市在住の鍵職人ロヘリオ・ロハスはバギオ市北方の山中で、高さ七一㎝の金むくの仏像を発見したといわれている。仏像には五〇万ドルの値がついたともいわれたが、同年4月5日未明に軍関係者がロハス宅を襲い、仏像を押収する。これはマルコスの母親ホセファの仕業といわれ、やがてロハスの訴

えで仏像が返還されるものの、真鋳製のものとすりかえられていたという。ロハスは一九六二年以来私財を注ぎ込み、財宝捜しに熱中した人物で、世界宝捜し協会のフィリピン支部長をつとめていた。彼はこの事件を機に、マルコス政権の不正と仏像返還を訴える。そのためしばしば逮捕拘禁され、一九七二年には野党の演説集会に参加した折り、爆弾事件に巻き込まれ負傷している。[2]

以上は今日まで人々の想像力を激しく駆りたてる財宝伝説の代表的な現われのいくつかの例である。さてそれではこうしたフォークロアが表現する意味とはいかなるものであろうか。この覚書では、以下の五つの視角から財宝伝説を検討することとする。(1)戦争の記憶を中心とする日比関係の経緯、(2)ファンタジーとうわさの問題、(3)富と経済、(4)フィリピンとその外部世界、(5)政治権力と財宝、がそれである。覚書の性格上、五つの視角を等しく、同じ比重で検討することは十分にできていない。またこうした五項目は必ずしも相互排除的ではなく、それぞれ互いに関連していることもつけ加えておきたい。

Ⅱ.

戦争の記憶とは想像する以上に幅のひろいものである。太平洋戦争によって、日本とフィリピンとのあいだに生じたさまざまの接点は、戦後五十年になろうとする今日でも、いまだに生々しい幾多の記憶となっており、折にふれてそれらのいくつかは再浮上し、戦争の記憶が再生産されていく。戦争の記憶であるからして、その多くが悲惨で残酷なものであることは言うをまたない。「バターン死の行進」や「マニラ虐殺」、いわゆる「従軍慰安婦」の問題、そして激しい対日ゲリラの活動などがその代表的なものである。その一方、日本の兵隊との交流の想い出や、小学校で習った日本語および唱歌の記憶も存在している。あるいはたまたま占領下で行政や警察の長であったばかりに対敵協力者とみなされて、ゲリラに「処刑」された人びとの家族が抱く記憶もある。「兵隊さん」に可愛がられたといった、ほっとするような少年の記憶をもって、戦争の悲惨が消えるわけではないし、そうした記憶を誇大にふくらませて、戦争を正当化することの愚はいうまでもない。しかし、戦争という接点がさまざまな物語りや記憶を、双方のあいだに生み出すということはあらためて述べておきたい。

太平洋戦争以前からフィリピンにはわれわれが想像する以上に多くの日本人が住みつき、ミンダナオ島のダバオやルソン島のバギオのように、そしてマニラでも、ある程度まとまった存在となっていた。昨日までバザールと呼ばれる雑貨屋の主人であった日本人が、開戦後すぐさま軍服姿で現れたり、憲兵となった記憶は今日でもしばしば語られる。日本はフィリピン社会のなかに、戦争準備のためにエージェントをすでに配置していたというものである。親しい近所づきあいをしていた者が突然憲兵として姿を現すというのは驚くべきことであり、この話をフィリピン人から聞かされるたびに、日本人に対するある種の不信が現在でも根強く生き残っていることに気づく。日本人の慰霊団が立ち去ったのちに、畑の穴が発見されたというエピソードは、日本人が未だにフィリピン社会からなにもの

かを剥奪しているとするフィリピン人の深い疑惑の存在を示している。また経済援助をめぐるうわさ（下水改修や道路補修の例）も、日本の真の意図に関する猜疑のありようを物語っている。長い植民地統治の歴史的背景（約三五〇年間のスペイン統治、および五〇年にわたるアメリカ統治）も与って、外国ないし外国人の意図はつねに疑惑の対象となる。経済援助のための基礎調査が収集するデータ（たとえば気象や社会に関わるもの）も、いつの日にか再度日本が軍事侵攻を行う際に利用されるのではないかという危惧もしばしば耳にする。こうした疑惑や危惧は現在の日本人からみると、およそ根拠のない、荒唐無稽なものと映るが、今日の日本および日本人のイメージも基本的には戦争の記憶に大きく由来している。

しかも戦後日本の経済成長と、それに続くエコノミック・パワーとしての日本の抬頭は、財宝伝説にさらなる屈折した根拠を与えている。日本で働き口はないものか、査証取得に便宜を計ってほしいといった要望に出会うことは、しばらくフィリピン社会に滞在すれば稀なことではない。また日本へ出稼ぎに行って、高価な耐久消費財を手に入れたとか、家を建てたという話もあとを絶たない。日本経済の大きさと姿は、少なくとも外部から見た場合、隠された財宝にある種のリアリティをつけ加えるといってよい。

戦後、山下奉文は戦犯容疑でマニラ南方のロス・バニョスで絞首刑に処され、もう日本では忘れ去られた存在である。しかしながら否定的な面（敵の司令官であり、間接にはマニラ虐殺の責任等の戦争責任の点で）に加えて、山下の勇名、とくにマレー・シンガポール攻略戦における戦歴は多くの年輩フィリピン人の記憶にとどまっている。また当時の日本人としては長身巨躯であったことから、強いイメージを残している。興味深いことは、山下のような、ある意味で「英雄的」な軍人に対し、彼が米国のウエスト・ポイント陸軍士官学校の卒業生であるとするうわさが広く流布している点である。事実は、山下は海外で駐在武官の経験はあるものの、ウエスト・ポイントに留学したことはないのである。当時米国の植民地であったフィリピン攻略とその後の軍政に際し、ある程度まで米国滞在経験者や英語に堪能な人材を送り込んだことは事実のようである。フィリピン人の戦争の記憶を辿って印象的なことは、比較的に「良い」日本人将校が米国の大学卒業者であったり、キリスト教信者であったという述懐である。その真実性はともかく、こうした要件は人間らしさの条件ととらえられていることがうかがわれる。

他方、巨額の財宝が残されたという伝説は、フィリピンが戦争中に蒙った災禍に対する見返りの一部という意識も潜在している。しかしながら、日本のODAによる開発援助工事の関係者が財宝の一部を手に入れるといったうわさは、見返りの財宝すらフィリピン人の手からぬけ落ちていってしまう状況を物語っている。その意味ではこの財宝伝説は、二国間の不均衡を浮き彫りにする言説といってもよい。

つぎに(2)ファンタジーとうわさの問題について検討する。ここではフィリピン国家のあり方についても言及しよう。

こうしたうわさは、たとえば土地のブローカーやなにごとでも仲

介を業とし、不確実でも儲け話があればすぐ寄ってくるような人びとの集まるコーヒーショップに行けば、いくらでも耳に入る。そうしたコーヒーショップはまた地方の政治家や政治に連なる小ボスの集まる場所でもあり、さらに不法な賭博の情報やゴシップが流通する空間ともなっている。バギオ市の繁華街にあるこうしたコーヒーショップは中国人か中国系フィリピン人の経営で早朝から多くの人で賑わい、低地のフィリピン人、中国系フィリピン人、山地の少数民族、商機を求める外国人など、さまざまな人びとが謂集している。「正確さを証明することのできる具体的な材料がないのに、普通、口から耳へと伝えられて、つぎつぎに人々の間に言いふらされ、信じられていく、今日の出来事に関する命題」[3]である「うわさ」が情報としてきわめて大きな意味をもつ空間が、こうしたコーヒーショップを中心として、それこそあらゆる方面に拡大しているのがフィリピン社会といってもよいであろう。「うわさ」には、予測された真実の情報から、意図的な操作、まったくの出まかせまでの幅がある。いちおう客観的で公正な情報を謳う新聞やそのほかのマス・メディアも、「うわさ」に依存し、場合によってはそれを増幅する働きをしている。「うわさ」がもつ、集団の凝集力を高める機能、あるいは集団に参画させる力はことのほか大きい。一般的に家族や親族など、小単位を越える凝集力が弱いといわれるフィリピン社会にとって、つかの間であろうと「うわさ」が社会凝集性に寄与している側面は否定できない。当然「うわさ」にはその生命に限りがあるため、次から次へと「うわさ」が生産される必要がある。あるいは、ひとつの「うわさ」の変異型が周期的に再生産されていく。そうなると長い生命をもつ「うわさ」は、「山下財宝」の話のように、「神話」や「伝説」としての側面をもつようになる。人びとのコスモロジカルな認識やパターン化された歴史観、社会観と結びつき、それらを再生産していく働きは、長続きする「うわさ」には附きものである。しかも「山下財宝」の物語りには、財宝、戦争、外国人の関与といったフィリピンの歴史を彩る基本的なモチーフが充満しており、マルコス大統領まで含めて登場人物に事欠かない。

この小論では「山下財宝」の物語が示す意味を、フィリピン社会・文化の脈絡のなかで国家のあり方、経済の状況と重ね合わせながら読み解いていく。この物語はフィリピン社会のありようを蘇かに示すと私は考えているが、であるからといって、荒唐無稽な物語がフィリピンの専有物であるといいたいのではない。「ナヒモフ号の財宝」や「M資金」など、政財界の一部まで巻き込む話が評判になったのはわが国でも起こった。もちろんそうした話題に関与するのは政財界といっても、どちらかといえばうさんくさい部分ではある。しかし「うわさ」や「宝捜し」は、およそまともな社会や国家とは対極にあると考えることは避けなければならない。もともと国家の「神話」はそうしたこととさほどかけ離れてはいないのである。けれども国家や社会はそうしたうさんくささを抑え、謹厳さを演出する身振りを、あるいはイデオロギーをつくり出すことをその主要な任務としている。その点、フィリピン社会、国家はこうした身ぶりを明瞭にしないといってよかろう。

発展を遂げた資本主義社会および急速に発展しつつある社会には、ひとつの共通点がみられる。それは稀少性や資源の不足を、まるで強迫観念のように強調することである。M・サーリンズのいい方を借りるなら、

「近代資本主義社会は、富にめぐまれているのに、稀少性の命題に終始している。世界でもっとも富んだ人々の第一原理が、経済手段の不備なのだ。経済のみかけの物質的状態は、その成果の手がかりとはならない。・・・市場＝産業システムは、まったく類をみない仕方で、また、どこにも比べるもののないほどに、稀少性を制度化している。生産と分配が価格変動を通じて調整され、一切の生計が金銭の収入と支出に依存しているところでは、物質的手段の不足が、あらゆる経済活動の、明白な、計算できる出発点となっている。」[4]

ということになる。

わが国でも高度経済成長期を通して、ほんの十年程前まで、「資源に恵まれぬ国」（あるのは「人材」だけ）という意識が政府の側にも、国民のあいだにも強固に存在していた。今日ではなり振り構わぬ輸出攻勢と批判される日本の貿易＝産業構造の底深く、そうした意識の影響をみることは難しくない。高い経済成長を誇り、アジアの「四小龍」のひとつと呼ばれるシンガポールでも事情は似通っている。そこでも「稀少性」と「不在」は国家的イデオロギーとなっている。「驚異」といわれる経済発展を遂げても、前首相のリー・クアンユーは国民を叱咤激励することをやめない。シンガポールのような資源小国、都市国家は、少しでも油断すればたちまちに滅亡するというわけであろう。

ところが経済発展に関してアジアの「バスケット・ケイス」とまでいわれるフィリピンをみると事情が異なる。このところ周辺諸国の発展ぶりを見るにつけ、ラモス大統領は懸命に国民の意識を変えようと試み、また経済発展に資する方策を積極的に進めようとしている。けれどもアジアＮＩＥＳ諸国やそのほかのアセアン諸国に較べて、「稀少性」ないし「不足」の認識には大分差があるように感じられる。いや、それらが国家的なイデオロギーとはなっていないといったらよいであろうか。

荒唐無稽といってしまえばそれまでだが、以下のような記事が大新聞の一面を飾ることもけして珍しくはない。合衆国からやってきたキリスト教の伝道師が、二十年以内にフィリピンはアジアのアメリカになると預言して話題となるようなことが起こる。フィリピンはアジアにおけるキリスト教伝道の中心であり、英語力に恵まれた国民が多いことが今後のフィリピン発展の原動力になるという。ここ数年フィリピンでも、「シンガポールに学べ」とか、タイ経済の活況を伝える新聞記事が増え、経済発展がより重大な関心事となった様子はある。けれどもそうした危機感の表明も、「この国は、台湾、韓国、いや日本よりもずっと多くの天然資源および人的資源をもっている。にもかかわらず経済発展では遅れをとってしまった。」とか、「なぜわれわれ〔フィリピン〕は低落して、五十年代や六十年代にははるかに劣っていた国々に追い抜かれてしまったのであろうか」といった常套句にいろどられている。このような評価や感覚

に真実性や根拠がないというのではない。けれどもシンガポールのリー元首相ばりのリアリズムをそこに感ずるとはいえないし、かつて池田首相が「貧乏人は麦を食え」と述べたような直截な認識に欠けるところがあるといってもいいすぎではなかろう。今から三十年ほど前、フィリピンはアジアのほかの国々に先んじていたことは確かであるし、シンガポールや韓国、台湾にくらべ天然資源にも恵まれている。それに経済発展に国民の関心をかきたてるためには、あまりに悲観的な図を描くばかりではなく、気持を鼓舞させるような未来図が必要だ。フィリピンの政治家のみならず外国からの外交団も、この国が投資先としていかに魅力的であるか、将来性があるかを述べ立てる。なかなか思うように発展しないフィリピン経済に「直言」したり、あるいは「友情ある説得」を行う意志も資格もないし、東アジア型の発展が果たしてモデルになるかも大いに疑問である。けれども「稀少性」や「危機感」の認識の拡がりに不十分さを感じる外国人は私のみならず、少なくないといっておこう。

「危機感」は高まっているものの、それが広い範囲で国民を巻き込むに至っていない原因は、社会の階層格差、共通目標の生まれ難さ等々さまざまであるといってよい。しかしなんといっても、それこそ民主主義の一面として、有権者には「苦い」ことを要求しないという傾向がかなりものをいっているのではなかろうか。民主主義とはもっとも対照的にみえる厳戒令期のマルコス政権下でも、いまよりはっきりとこうした傾向がうかがえる。厳戒令は疑いもなく強権政治ではあったが、他方その正統性はけして直接的な暴力によってのみ保証されるわけではない。戒厳令下でその影響力がはじめて高まったとはいえ、軍隊の力はフィリピンでは限られていた。またマルコス大統領が恣意的ではあってもしばしば民主主義に言及したり、その手続制度に注意を払っていたことも、正統性をなんとか維持しようとする政治戦術のひとつであった。戒厳令の施行直後に発表された戦略のひとつがF・J・エリザルデによるもので、彼はそのなかで、新しいフィリピン国民と政府に対する肯定的な展望の必要性を説いている。その際に用いられた主要な修辞的戦略が神話の採用であったといってよい。ここでいう神話とはもちろん政治的な意図をもつ、神話的再編であり、マルコスを救国のナショナリスト・ヒーローとして描き出し、同時に戒厳令の正統性を明らかにする方策のことである。

その主題はなんといっても、フィリピン社会の病根がその植民地的過去に存することを強調するものであった。フィリピンの歴史は、一方では外来の植民地勢力ないし侵入者に対する英雄的な抵抗の神話であり、他方同時に有産エリート階層を中心とする外来勢力との妥協と対敵協力であった。こうした矛盾に生ずるアイデンティティの危機をマルコスは巧みに利用している。彼がしばしば強調した、「アジア性」、バランガイなどの「伝統的」価値と制度、英雄的な戦い等は、「真の」フィリピン的価値を徴づける象徴となった。のちに誇大妄想となっていく「偉大さ」の希求は就任演説にも明らかであり、その論法は国民からかなりの程度受け入れられたのである。マルコスの神話的レトリックは、「フィリピン的」な価値を肯定す

るうえできわめて文化主義的な様相を呈しており、それは現在の土俗的文化をフィリピン固有文化とみなすナショナリスティックな傾向に連なっている。こうしたレトリックがもたらしたのは、過去の美化ないし美学的再構築であり、一種のファンタジー作用であった。「想像の共同体」として国民あるいは国民国家を構想するとき、神話やファンタジーが果たす作用の重要性はいうまでもない。しかしながら国民国家ということばが示すとおり、国民と国家が緊張をはらむとしても、そこになんらかの折合いがつかねばこの稀にみる一致は実現できない。マルコスの修辞学はその意味で、多くの独裁者が用いたレトリックと同様に、国民的統合と国家的統一をもたらすようでいて、実は幻想を呼び込み、実際の統合を遠ざけるほうに働いたようである。卓越した修辞家にしてその陥し穴にはまったといってよかろうか、ナショナリズムの修辞学がその力を振るった時代は当時もう峠を越していたのである。同時期の東南アジアでは同じように強権と呼ばれてはいたが、スハルトにしろ、リー・クアンユーにしろ、タノムにしろ、より実務家的で、それこそ「面白みのない」リーダーシップの時代が到来していたのである。

「稀少性」よりも「誇大」、冷徹なリアリズムよりファンタジーを強調せざるをえないマルコス政権下に、「山下財宝」のうわさがあぶり出されたのも、以上の事情をみれば必然的といってよいのかもしれない。戒厳令や強権は、それこそ権力の行き届かぬ空間を排除し、あらゆるところを威令で充満させることを目的とする。にもかかわらず、それはまた正統な権力が社会に発生し、行き渡ることがないがために採用される、およそ見込みのない、しかしいったんは有効に思える方法であるといってよい。強権の威令が届かぬことは、うわさや逆説が殊のほか流通し、強権に対する民族的な想像力や反抗が行われる点からも明らかである。日本占領下のマニラで繰り広げられたフィリピン人エリート層による対敵協力に関する興味深い論考のなかで、V・ラファエルは、戦時下の「うわさ」について次のように語っている。

「うわさは当然ながら、戦時下など権威が大きく揺らぐ時によくみられる。うわさは、事実はかくの如しという合意にもとずき、公に認められた「真実」にとって代わり、位置を占めるものである。」[5]同時に「うわさ」とは、出来事およびその展開の可能性を想像することによって、出来事の推移に直接的には関わることのない人々をも、出来事になんらかの形で参画できるようにする手だてでもある。すなわち、

「うわさを拡めて歩くこととは、ある程度までは権力の回路に参加したいと望む欲求のあらわれといってよく、まったく同じとはいえぬまでも、対敵協力のダイナミクスを真似ることでもある。」[6]

ラファエルのいうように「うわさ」はアングラ的な言説であり、「発生する事態をわが手に獲得することなしで、出来事をなんでも理解しようとする可能性」[7]をもった言説なのである。自らがことの進展を支配しておらず、直接関わってもいない出来事を理解しようとするのが「うわさ」の作用であるとすれば、それは正史に対する裏面史であるといってよく、権力から隔絶した一般人にも可能な、

民衆的想像力の発露でもあるといわねばなるまい。

「うわさ」やゴシップはどの社会にも存在する。しかしながら程度問題とはいえ、最大の発行部数を誇る日刊新聞の一面に、吸血鬼、両性具有者の妊娠、聖母マリアの出現、宇宙人との邂逅、地球の終わり等々のニュース／うわさが息つく暇もなく掲載され、その間にも、警官による集団強姦殺人死体遺棄、誘拐や賭博への警察・軍の組織的介入、国税当局上層部の大規模な脱税、大統領選無効の訴え、などが、その真意はともかくトップニュースとして報じられるフィリピン社会をみていると、民衆的想像力の闊達さに感心する一方で、正統なる権力の空白、国家の脆弱さを感じずにいないのである。

タイやシンガポールにおける国家の言説の厳粛さや面白味のなさと較べて、あるいは新聞紙面の構成の「まともさ」をみると、うわさとゴシップがこれほどまでに望まれ、また流通する意味を軽んずることはできない。さき程述べたように、ふつうもっとも謹厳かつ真面目（滑稽なほどに）でしかありえない戒厳令下で、施行後ほどなくうわさが噴出し、それも民衆側ばかりでなく、政府側もまた突飛な話題をつくり出していったことは、やはりフィリピン社会の一面を示す特徴といわなくてはならない。そうした国家の厳格性を体現するような戒厳令下、その指導者が自らも語り、また渦中に立ったのが、「山下財宝」をめぐる挿話なのである。

フィリピン国家の脆弱性については、これまで多くの議論がなされている。そのひとつの代表といってよいのがR・ペルティエラの論考である。彼は、

「それ〔フィリピン国家〕は組織として、村レベルでの日常生活の形の如くに行われる些事に巧みに入り込むに至らず、それを首尾よく規定することもできない。法と秩序の執行も、日常生活の多くの面で（たとえば、家族、仕事、連帯のネットワークなど）、人びとが規範として、またよく認識して、国家の構造を通して受け入れるにところとならない。」[8]

と述べている。フィリピン国家が、その

「イデオロギーの再生産を行うときに依存する規範的な合意（たとえばフィリピン人の文化的アイデンティティ）は、国家の統制の外にある（たとえば、国語を首尾よく徹底できないこと、ナショナリズムや宗教について統一的でない下層の抵抗的言説を払拭できぬこと）。同様に、国家による物質的＝経済的な再生産の条件も国家の管轄のラチ外に存在している（外国からの援助ならびに投資、海外労働で獲得された賃金の送金などが例である）。そのため、実際に給料を支給する引き換えに、官吏や国民から忠誠心を期待することは不可能であり、ひいてはそれが国家の正統性の源をくつがえしている。」[9]

結局のところ大方のフィリピン人は、家族や親族、そして近隣の集団などの身近なネットワークに依存し（あるいはそうせざるを得ず）、政府の施策を当てにするよりは、外国に出かけた家族の送金に頼って生計を立てている人びとも多い。政府の側も、国民の生活に介入し、とりもなおさず福利を与える努力や保証を最小限にしか行わない。国民総生産に占める徴税の割合もほかのアセアン諸国と

較べ1／2から1／3であり、かつては高率を誇った教育予算の全予算に占める割合も低下する一方といってよい。汚職腐敗、官吏による凶悪犯罪、軍隊の横暴についても、その真偽はともかく事件が報道されぬ日はないといってよい程である。

国民国家は、多くの限界が指摘されているにせよ、現在のところ唯一の政体のように思われている。しかし西欧を中心とするごく少数の国家を除いて、そのほかの地域で国民国家が十全に実現されてる例は少ない。むしろ国民国家が非西欧社会にとって可能なモデルであるのか否か、検討する必要が生じている。さてフィリピンの場合、国家よりも社会が優越しており、また国家と国民との連接感も小さい。国家の脆弱性に関してはこれまでにも述べてきたが、最大の問題は、国家がファンタジーを生きる傾向が強いことであるといえよう。シンガポールの不断の成長信仰も、タイの発展至上主義もいずれも神話＝ファンタジー的なものではある。しかしそこにはかなりの程度の結果責任と、政府のパフォーマンスおよび実績が認められる。今のところその点に、フィリピンの場合違いがあるといってもさしつかえはないであろう。いわば現実と夢の接ぎ穂にリアリティを求めにくいのがこれまでのフィリピン社会のあり方であったといってよい。そうした経緯のなかで、国家が不動の準拠点となって社会の軌跡に少しでも現実性をつけ加えていくというよりも、むしろ接ぎ穂なしに、ファンタジーの格子のなかになだれ込むようなところがあった。

Ⅲ.

不正蓄財の隠れ蓑に荒唐無稽な財宝伝説とは、滅茶苦茶にみえてそうではない。突出した財貨の獲得や富裕に対し、多くの社会では妖術の行使や不穏当な手段の存在をほのめかす。あるいは財宝の発見もしばしばとびぬけた富裕の理由とされる。文化の脈絡からみると、マルコスと財宝の挿話はまさに必然的に結びつくといってよい。

メキシコの農民社会を舞台にジョージ・フォスターは今日でもあらためて注目に値する見解を述べている。[10] 土器つくりと農耕を主たる生業とするツィンツンツァンと呼ばれる村では、仕事を終えた人びとが夕刻集まると、尋常ではない方法で富を得た人々の話題がしばしば語られるという。人々がいちだんと強い関心を示すのは、財宝を掘りあてた話と相場が決まっている。こうした話は純然たる神話でもなければ伝説でも民話でもない。財宝話には、フォスターによると二つのタイプがある。第一は、悪魔に魂を売り渡し、それと引き換えに財宝を得る、というものである。二番めのタイプはたんに財宝を発見する話で、a．スペイン未襲時にタラスコのかつての王が埋めた黄金の装飾品を掘りあてる、b．北部の鉱山から太平洋岸の港に金銀を運ぶ途中、襲撃を怖れて隊商が埋めた財宝を発見する、c．一九一〇年に始まるメキシコ革命時に将軍が埋めた銀貨を見つける、の三通りの発見による。こうした財宝の発見には、たとえば財宝が危険なガスを発するとか、秘密保持のために埋められた関係者の霊がさ迷っているなどの話題が付随している。

宝捜しの話は、その多くが実在の人物が登場する歴史的な話であ

るが、同時にファンタジー的でもある。しかもフォスターは、そうした話がくり返し語られる背景に、機能的な理由が存在するという。すなわち財宝をめぐる話は共同体における、経済的な世界観と大きく関わっており、それが語られるのはそうした世界観の認知であり、かつまたそれを維持する機能をもつ。ツィンツンツァンの経済をめぐる世界観の特徴は、成長や発展の余地のない停滞する経済の構図をもっていた。つまり生産性を上げるために、より多く労働投下を行うとか、生産手段を改良するといった試みは意味がないととらえられ、あるいはなされない社会像が浮かび上がってくる。その大きな理由は、利用できる土地に限度があること、そのほかの生産手段にも限界があることによる。いくら働いても人より多くの生産を上げ、収入を得ることの難しい社会なのである。そのため富とは人が増殖させたり、拡大するものとは考えられず、社会の中には限度ある存在物として存するものととらえられている。しかも伝統的な共同体においては、どの家がどれほどの生産と収入をあげるかは周知の事実である。その結果もしかりに村人の誰かが顕著な富の集積を果たすとなると、その理由は日頃の経済の論理とはちがう次元に求められなくてはならない。共同体が得る富の総和は一定しており、そのため突出した富は、誰かが強制的な方法ないしは巧妙に、他人が得べかりし富を侵害するか、あるいは共同体の外に存在する富を手に入れる方途をみつけ出したか、のいずれかの方法による取得と説明される。

フォスターは、他人が得べかりし富を侵害することによって富裕になるという考え方、あるいは富は限られて存在しており、各人は自己の取り分を極大化するために努力を傾注するといった社会のあり方が、こうした社会において人々が嫉妬深いことや、対人関係がしばしば貧弱であることの理由であると述べている。他方、外部から富を手に入れることは、それがまっとうな方法である限りは共同体にとって脅威ではない。メキシコ北部はとりわけ合衆国経済に深く組み込まれているが、ブラセーロとして合衆国で労働する者は、その収入から富を得て、家を建てたりする。そのような富の出所は誰にでもはっきりしているので、説明を要さない。ところがそうした説明が成り立たぬ場合、たとえばはっきりとした外的な収入もない者が、店を開いたり、家を新築すると別の説明が必要となる。フォスターは、そのような場合に財宝を取得した話がかなりの度合で有力な説明となっているという。彼によると、財宝獲得の話は、この社会がもつ「限定された富」という世界観を維持するうえで役立つことなる。すなわち、なんらかの不法な手段ではなく、しかも社会全体のなかで限定された富が、特定の人物や家族に急に増加することを、宇宙観を損ねることなく説明する方法として、急に宝物を手に入れる話はきわめて説得的ということとなる。とりわけ経済的に停滞した社会では、プロテスタント的禁欲の倫理や精励刻苦の物語にはあまり意味がなく、「経済上」の成功はむしろ通常の経済のラチ外に求められる。幸運や賭けの要素が富の生成と密接に関わるといってよいのである。ただしこの運や賭けの要素は投資や経済のリスクを負うこととは繋がらない。むしろリスクを嫌い、地代や家

賃など投資なしの収入に依存し、ただひたすら運を待つ態度が顕著なのが停滞経済の特質といってよい。経済が停滞し、利用可能な資源が限定されているからこそ、一挙に、運まかせで富を獲得することへの希求が高まるのであり、運を待つために、投資や着実な、眼にみえる労働や努力でなしに、むしろ活動の少なさが眼につくのである。

フォスターの所説は、彼のいう停滞的な「農民社会」というステレオ・タイプ的な社会観に立脚しているが、最近二十年間のフィリピン経済の停滞状況を考えると、「山下財宝」伝説を考える際にも一定の説得力をもつ。しかしながらここでもうひとつ興味深い問題がある。それは「宝捜し」の結末が、きわめて多くの場合不首尾に終わることと関係する。フォスターの述べるように、財宝伝説は経済的に停滞し、たとえば投資が再生産される過程が十分に機能をしない社会において大きな意味をもつ。その一方、財宝の存在が信じられ、しかもその実際の取得がなされない場合、役に立つ可能性は低い（富を生み出すことのない）ものの無限の富の存在が前提されているともいえる。[11] 前に述べたように、フィリピン社会には潜在的な資源の豊富さに関する強い信仰がある。その潜在的な資源は、植民地制度による剥奪、社会階層間の葛藤、失政、天災などのせいで、なかなか実質的な富を生み出さない。限定された富と無限の富との奇妙な交差に財宝伝説が生ずるといってもよい。

さらに宝捜しには「運」の要素が大きい。宝を捜し、それに出会うことは、あらゆる人に聞かれているとはいえ、それはまさに運の問題でもある。この運は一獲千金的な考えと結びつく。さきに述べたように、限定された富と無限の富のフォークロアが交差するフィリピン社会の多くの人びとにとって、資本や技術は手の届くところにはなく、穏当な投資が妥当な見返りを生み出す過程は縁遠い。また資源に恵まれた者は、その特権を生かすべく、商業活動であれば、長い視野のもとに、薄利多売をめざす商形式ではなく、独占的であったり、情報や物品の多寡と落差を利用する収奪的な方向性を強くもつ。ここでも宝捜しのファンタジー、運を強調する言説を支える社会状況の存在がうかがわれる。

Ⅳ.

「山下財宝」の伝説は、フィリピンと日本との関係ないし文化のインターフェイスをはじめとして、フィリピンと外部世界とのはざまに生ずる関係性の物語である。

フィリピンと日本の関係といって、それは単なる二者関係ととどまらない。直接、間接にそこにはつねに米国の存在を否定できない。財宝伝説に直接関連するエピソードをみても、たとえば山下奉文がウエスト・ポイント出身といううわさがある。また戦後、大規模で組織化された方法で宝捜しを行ったのは米国人である。いうまでもなくフィリピンを戦場として闘ったのは日米両国であった。

さらに「山下財宝」の出所は、どこと特定されてはいないが、東南アジアで略奪されたものといわれている。当時の戦況、また山下奉文の転属の軌跡からみて、ほかの東南アジアの国々で奪われた財宝がフィリピンへわざわざ集められた可能性はあまり考えられな

い。しかしながら一般に信じられているところをみると、フィリピンが東南アジアの中心であり、かつ同国に「富」が集中するという考え方が認められるのではないか。現在の経済状況から判断すると、こうした考え方にはおよそ根拠が薄いように思われる。けれども一九三〇年代および一九五〇年代、六十年代のフィリピンの東南アジアにおける先進的な地位をみると、このような感覚もけして不可思議とはいえない。現在の外資導入に対するフィリピン人の大方の感覚をみても、国内の政治、治安、インフラストラクチュアの点から外部者が感ずる投資環境の悪さとは反対に、なぜ外資がもっと入ってこないかフィリピン人にとってよく理解できぬようである。一方で歴史的に外部世界と接触せざるを得なかったフィリピン社会が、他方こうした感覚ギャップをもっていること自体、フィリピンと外部世界との一種奇妙な関係を示している。

さて外部世界との連接はフィリピンにおける政治権力の正統性とも繋がりをもっている。かつて植民地権力との連接は正統性の大いなる保証であった。ケソン大統領から現在まで米国による承認は国内権力の源泉であり、マルコスが失脚したのも米国が見放したことが決定的な要因であった。

前述したように外部の「富」は、たとえば出稼ぎによる労働力の国際移動を促し、また海外労働の結果得られた収入が、国内の既存の経済階層に若干の変動をもたらしていることも指摘できる。もちろん経済的な上層と中、下層とのギャップはきわめて大きいため、海外からの送金がつくり出す変動はあくまで中間層の内部にとどまる。それでも外部の影響は少なからず認められ、国内の力関係に変更をもたらす。

財宝の取得をうわさされる人物がマルコスであったり、バルウェグ神父であったりアギナルド知事であることは興味深い。スケールの差はあるが、いずれも通常の範囲を越えた政治権力の持ち主である。あるいはそれであるからこそ、財宝の発見がうわさされるといってもよい。コラソン・アキーノ前大統領の実家であり、政治的、経済的に大きな影響力をもつコファンコ家についても財宝取得のうわさがある。同家の祖先のひとり、イシドラ・コファンコはかつてフィリピン独立戦争時に革命側の軍資金を手に入れたといわれている。イシドラ・コファンコは革命軍の重鎮ホアン・ルナの恋人で、一時的にルナから軍資金を預けられたという。ルナは戦闘の渦中でほどなく死亡し、結局軍資金はイシドラの手に入る。これが資金となって現在のコファンコ財閥の基礎が築かれたという話がある。こうした事例はフォスターの所説を想い起こさせる。それとともに財宝を手に入れる強運（場合によっては非道や横暴も含めて）がこの社会では政治権力の形式と密接に関連していることがわかる。一般人の視線はこうした権力と財力に対し羨望の気持ちと、なにやらうさんくさい気持ちとを二つながらに持っている。

これまでの数々の政府による調査や関係者の証言によると、全貌は定かではないものの、山下財宝を取得したというマルコスの主張に信憑性は乏しい。むしろ国庫そのほかから巨額の収奪、横領を行ったとみるほうが妥当なようである。[12] 問題は財宝が、見つけられた

にせよ、そうでないならばなおさら、不毛の富としての意味しかもっていないことにある。

中央山地の少数民族には金採掘の起源神話がある。貧しいが淳良な家族が、やっとのことで祖先供養の儀礼を行う。供儀用の豚を人から借りて儀礼を開くのであるが、その途中暴れた豚が臼を倒したことで、そこにいたネズミが下敷きとなって死んでしまう。やがてネズミを埋めたところから木が生え、黄金の葉が繁り、黄金の果実が実をつける。貧しい家族は近隣の人びととこの富を分かち合う。しかしだんだん欲が出て富をひとり占めしたくなり、また木が伸びて葉や果実に手が届かなくなったため、秘かに木を切り倒す。木は倒れるやいなやばらばらになり、葉はあちらの方向に、果実はこちらに、木の幹はまたべつの方向に飛び去り、土中深くにもぐってしまう。こうしてその後人間は金を捜すのに土を掘らねばなくなる。

強欲と富との関係はさまざまな場所で道徳譚として語られる。財宝は人びとの憧憬や幻想をかきたてるばかりでなく、欲と切り離すことはできない。財宝を得たものがしばしば不幸に陥ったり、災禍にさらされたりするように、財宝には否定的な側面も存在する。その意味では山下財宝伝説も、そしてマルコスの富も、そしてさらにいえばフィリピン有産階層の富すらもが、社会全体の豊かさを増し、再生産を確かにする方向には展開していない。この「不毛性」こそが、フィリピン社会の戦後を彩る基調音といってよく、財宝伝説やうわさの喚起力が相対的に弱まってきた、ほかの経済発展を遂げる東南アジア諸国との著しい対照を示しているのである。

注

(1)「山下財宝」とマルコスの不正蓄財については、自らも財宝発掘に加わったMcDougald, C. C. "Asian Loot", San Francisco Publishers, 1993. に詳しい。もちろんこれは当事者の手によるもので、その点の限界はある。

(2) 一九七二年、反マルコスの旗のもとに、野党が政治集会を開いている最中、爆弾が投げ込まれ、多くの死傷者を出した。政府はこれを共産主義者の仕業と断定し、戒厳令施行の口実のひとつとした。

(3) ジャン＝ノエル・カプフェレ（古田幸男訳）『うわさ：もっとも古いメディア』法政大学出版局、一九八八年。

(4) マーシャル・サーリンズ（山内昶訳）『石器時代の経済学』、法政大学出版局、一九八八年、十一頁～十二頁。

(5) Rafael, V. L. 'Anticipating Nationhood:Collaboration and Rumor in the Japanese Occupation of Manila' in "Diaspora", Spring 1991, pp.74－75.

(6) ibid, p.75.

(7) ibid, p.75.

(8) Pertiera, R. 'National Consciousness and Arenas of Struggle' in "Asian studies", p.1.

(9) ibid. p.1.

(10) Foster, G. M. 'Treasure Tales, And the Image of the Static Economy in a Mexican Peasant Community' in "Journal of American Folklore", Jan. －March, 1964, Vol.77, No.303による。

(11) この点に関しては、Lindow, J. 'Swedish Legends of Buried Treasure' in "Journal of American Folklore"Vol.95. No.377, 1982 および Dundes, A. 'Folk Ideas as Units of Worldview' in "Journal of Ameri-

can Folklore"Vol.84, pp.93－103, 1971参照。

(12) ベリンダ・A・アキノ（伊藤美名子訳）『略奪の政治』同文館、平成4年に詳しい。

Notes on "Yamashita Treasure Tales"

There is a wide spread rumor that General Yamashita of The Japanese Army buried their war coffer consisted of gold bullions, precious stones, and silver coins in the Philippine soil when they expected the defeat of the Pacific War. Today, many of Philipinos and others are still engaged in treasure hunting in various parts of the country.

This paper aims to interpret Yamashita treasure tales from the following five perspectives. 1) The rumor emerged and has been maintained at the socio-cultural interface between Japan and the Philippines. 2) Yamashita treasure tales show a conspicious nature as a folk tale tainted deeply with a historical tragectory and cosmology of the society. 3) Treasure tales and treasure hunting there reveal the meaning of wealth and scarcity in its historico-economic process of the country since the end of the Pacific War to the present. 4) The tale also shows the inter-relations between the Philippines and its outside world. 5) Aquisition of the treasure or at least the rumor of it implies the relations between wealth and power. The rumor that Ferdinand Marcos obtained hidden treasure somehow, though strangely, legitimized his enormous political standing.

Key Words

Yamashita Treasure, cultural interface, memory of war, notion of wealth